



けやき会通信



雑感 老いに思う

石綿 正江

昨年の櫛会創立40周年記念事業に前副会長新井様の文集への寄稿呼びかけに応募し、自分の15年間の糖尿病の闘病生活体験と折に触れて感じる人生雑感を一筆書き述べました。このたび、寄稿文の内、載せ切れなかった部分を細切れながら掲載させて頂く事になりました。

【傘寿を迎えて】

私の糖尿歴は15年、年齢80歳、神経障害あり、血圧135位、ヘモグロビンA1Cは6.6%位、経口薬服用、インスリンはまだと言った具合です。

昨年5月私は傘寿を迎えました。

今まで無関心だった人生最後の心境は霧に包まれていて、本人は語る気力も失せ衰え、そして死に至るその際の姿を、我が身を通して自然から教えられつつあると感じる。誰もが通る道、人間らしくもがき苦しみ、怖れ、神にすぎるよりすべがない。古い仏像や寺院、歴史がそれを語っている。人生は仮の姿、そんなに頑張り苦しむ必要はない、たとえ天下を手にしたつわものどもその夢は虚しく消え去り忘れられて行く。私は近くにある鎌倉の史蹟を時折訪ねて武士の雄叫びの声、滅亡の悲哀の渦を目にし、感じ、手を合わせる。人間の愚かさは今も続いており世界を巻き込んで行く。

糖尿病など物の数ではないと、どこかに吸い込まれてゆくかもしれない。でも私達には命に係わる一大事だ。高齢の1日1日は若者の数年にも値する大切な時間だ、せめて思った事を行動に移す勇気を持ちたいと思う。

【私の誕生日】

高齢で何も出来なくなった私でも何か一つ生き甲斐を残しておきたいと今は絵を描いています。教育入院の空き時間に6階の病棟からの美しい眺めをミニスケッチしました。6枚ほど出来上がり窓に置きました。回診の先生方がニコッと見て下さっています。

そして5月13日の朝一番に看護師さんが来るなり「お誕生日おめでとうございます」と言って下さいました。何も知らぬはずなのにどうしてと思いましたが、たぶんカルテを見て解ったのだと思います。更に朝食のお盆にも誕生カードが載せられていました。

私の家族では5月の母の日も、私の誕生日もいつも無視されています。本当に嬉しかったので手元にあったスケッチ3枚をプレゼントしました。すると何日か後には「談話室」と「ナースステーション入り口」の額縁に収まって飾られていました。つたない絵ですが病室の緊張感を柔らげるお役に立てたら幸せと思っていましたので看護師さんのお気持ちに感謝しました。その絵は今も東病棟の談話室でひっそりと皆様を見守らせて頂いています。

【認知症を受け入れた私】

「さかえ」の2~3月号(2015年)、山口晴保先生の文を読みました。アルツハイマーの症状は始め無症状の時期が20年、物忘れの時期10~15年、合計40年で死に至るとありました。軽度認知障害MCIの時期は記憶能力が低下していても、生活管理能力は保たれ認知症とは言えぬ状態、正常と認知症の間を言う、そして数年で認知症に移行する危険が高い前段階であるとありました。

私は今この段階にあると思います。ゆっくりと20年間に進行するのなら、私の寿命は4、5年と見れば却って病いからくる死を怖れる不安が除かれ心静かに過ごせるのではないかと考えました。前段階の「私は軽度認知症」と自他共に認めれば、そうならないためにこうせねばと力みや焦りなどの不安が解消し穏やかな日々が送れるのではないかと思います。

物忘れの晩年には、その度合いにもよりますが、却って幸せではないかと気づきました。そして私は今、その穏やかな中にいます。

(編集者注)

ご本人が認知症という事ではありません。老いを深める中では記との関係で「認知症という考え方」を嫌がらずに受け入れたら年齢を重ねて行く人生も逆に楽になる面があるのではという意味です。

交信の度に石綿さんは本当に心豊かな人生を送っておられるとしみじみ思いました。

